はじめに

古代史の解明には地名が重要である。地名の比定を誤ると間違った歴史がつくられる。

たとえば崇神天皇陵は「山辺の道」にある「崇神天皇陵古墳（行灯山古墳）」に比定されている。しかし『古事記』の「御陵は山辺の道の勾りの岡の上にあり」という記述に合わない。現在の「山辺の道」は曲がっていないし、行灯山古墳は「岡の上」にない。「山辺の道の下」にある。

「神武東征」の熊野の荒坂津（亦の名は丹敷浦（にしきうら））は三重県度会郡紀勢町錦に比定されている。これもおかしい。『古事記』には熊野から「吉野河の河尻に到る」とある。三重県度会郡から吉野川へ行くと吉野川の川上に出る。本居宣長も『古事記伝』の中で「地理を考えるに違えるがごとし」と疑問を投げかけている。

「神武東征」では浪速（大阪）から日下（東大阪市日下町）まで船で来たと書いている。日下は内陸にあり、船で行けるようなところではない。そのため『記』『紀』の記述は信憑性がないといわれてきた。ところが地質学の調査により、弥生時代末ー古墳時代前期ころには河内湖があり、船で行けることが明らかになった。

『記』『紀』は史実を記録している。従来は比定地の方が間違っていた。「神武東征」や崇神天皇にかかわる地名を見直すと真の古代史が復元される。

１９９８年１２月

目　　次

第１部　伊都国の東遷 1

第１章「神武東征」とその原因 3
1 「神武東征」の出発地 4
2 「神武東征」の時期と原因 9

第２章 神武東征のルート 15
1 北部九州のルート 16
2 大阪のルート 26
3 和歌山のルート 32
4 和歌山県伊都郡と伊都国 43
5 忍坂より磯城へ 49

第３章 神武天皇と桜井茶臼山古墳 53
1 畝傍山と神武天皇陵 54
2 磐余と桜井茶臼山古墳 57

第４章「東征」の証明（文献より） 65
1 『新唐書』の神武天皇 66
2 壬申の乱と神武天皇陵 68
3 伊勢・志摩の地名の移動 71

第５章「東征」の証明（遺跡より） 79
1 珍彦と西新町遺跡 80
2 見田・大沢古墳 82
3 メスリ山古墳と大久米命 86

第２部　夫餘族崇神の建国 95

第１章 崇神天皇と宗教 97
1 崇神天皇と異宗教 98
2 崇神天皇の改宗 100

第２章 崇神天皇と武埴安彦の戦い 105
1 崇神天皇と武埴安彦 106
2 那羅山 112

第３章 崇神天皇と椿井大塚山古墳 117
1 現・崇神天皇陵への疑問 118
2 崇神天皇陵とは 119
3 椿井大塚山古墳 121

第４章 崇神天皇と夫余族 133
1 崇神天皇は渡来人 134
2 崇神天皇と迦葉原夫餘 136
3 崇神天皇の渡来ルート 146

第３部　「初期ヤマト王権」の実体 151

第１章 饒速日命と纒向遺跡 153
1 「初期ヤマト王権」のはじまり 154
2 饒速日命 161
3 神武天皇の実年代 167
4 饒速日命と纒向王権 174

第２章 神武天皇と磐余王権 179
1 神武天皇とその支配領域 180
2 神武天皇と纒向遺跡 183

第３章 綏靖天皇と三輪王権 185

1 神渟名川耳命と多藝志美美命……186
2 真の第２代天皇……188
3 綏靖天皇と纒向勢力……193

第４章 崇神天皇と初期ヤマト王権……197
1 崇神勢力の南下……198
2 綏靖王権の衰退……200
3 最初の統一王朝……203

第５章 初期八代の天皇……215
1 闕史八代……216
2 初期八代天皇の系譜……219
3 饒速日命の系譜……228
4 「初期ヤマト王権」のまとめ……233

第６章 尺度からみた初期ヤマト王権……235
1 古代の尺度……236
2 纒向遺跡の尺度……240
3 初期ヤマト王権の尺度……245

第１部　伊都国の東遷

第１章　「神武東征」とその原因

1　「神武東征」の出発地

(1)「神武東征」とは

『記』は「神武東征」を概略次のように書いている。

> 日向より出発して豊国の宇沙へ行き、筑紫の岡田宮に一年留まり、安岐国（広島県）の多祁理宮に七年、吉備（岡山県）の高島宮に八年留まる。浪速（大阪）の渡りを経て、青雲の白肩津へ行く。ここで那賀須泥毘古（ながすねひこ）と戦う。五瀬命（いつせのみこと）は傷を負い、一行は逃げて紀国（和歌山県）の男之水門へ来る。五瀬命は傷がもとで死去し、和歌山市の竈山に埋葬される。
> 神武天皇は熊野村へ行き、吉野へ出て、宇陀から大和へ入り、畝火（うねび）の橿原宮に都を定める。　　『記』（概略）

神武天皇は日向を出発して瀬戸内海を通り、大阪へ立ち寄り、和歌山から熊野へ行き、吉野から奈良県宇陀を経て、畝傍山の橿原宮に都を定めたとある。これがいわゆる「神武東征」である。

(2) 出発地「日向」

神武東征は「日向を出発する」とある。「日向」は宮崎県であると考えられてきた。従来の「神武東征のルート」は次のようになっている。

図１　従来の東征ルート（九州、瀬戸内海）
（安本美典著『神武東征』（中公新書）より）

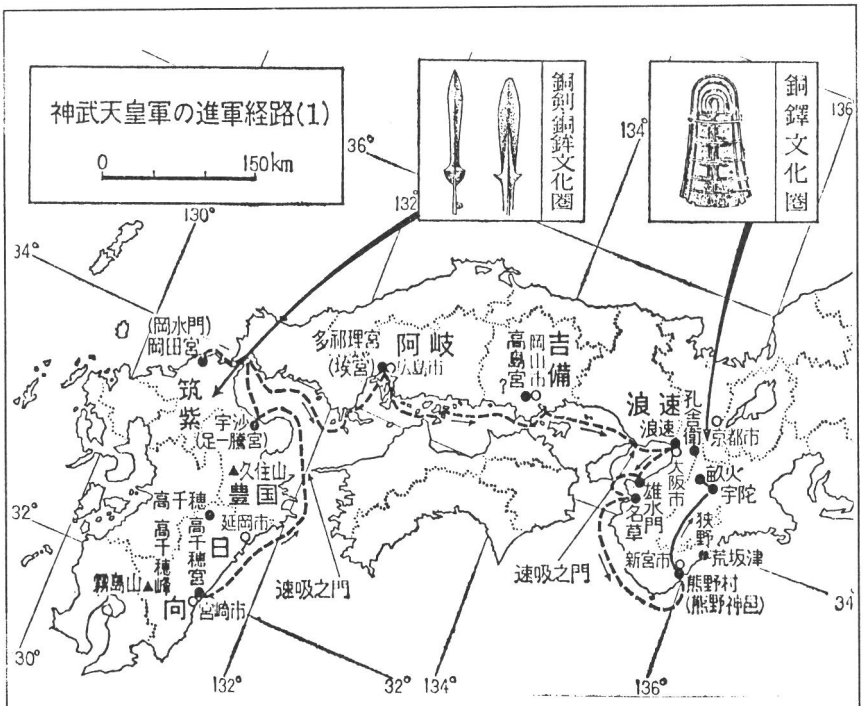


図１　従来の東征ルート（九州、瀬戸内海）

しかし、神武天皇は天孫降臨した天族の子孫である。天孫降臨の地は「筑紫の日向」であり、その遺跡は福岡市西区の吉武高木遺跡である。（古代史の復元①『倭人のルーツと渤海沿岸』参照）

天族はその後福岡県前原市へ移り、伊都国王朝（ウガヤフキアエズ王朝）を樹立する。神武天皇はその後裔である。出発地「日向」は「筑紫の日向」であり、伊都国（福岡県前原市）であろう。

(3) 五瀬命と伊都国

『記』『紀』は「神武東征」のリーダーを神武天皇であるかのように書いている。

> 神倭伊波禮毘古命（神武天皇）、その伊呂兄（いろせ）五瀬命と二柱、高千穂宮に座して議（はか）りて云う、……。　『記』

神武天皇は兄の五瀬命と相談をして東征を決めている。『紀』の方は次のように書いている。

> （神武）天皇、親（みずか）ら諸皇子・舟師を帥（ひき）いて東征す。　『紀』

神武天皇は諸皇子・舟師を率いて東征に出たとある。神武天皇が中心人物である。

しかし五瀬命は長男である。神武天皇は四男であり、さらに上に二人の兄がいる。末っ子の神武天皇がリーダーであるはずはない。神武東征のリーダーは長男の五瀬命であろう。『宮下文書』は五瀬命を「皇太子海津彦五瀬王命」と書いている。五瀬命は皇太子である。

五瀬命は東征の途中で死去する。二人の兄も死去する。東征を成し遂げたのは神武天皇である。そのため「神武東征」といわれている。

五瀬命は「イツセの命」である。五＝「イツ」である。「イツ」は伊都国（イツ国）の「イツ」であろう。

> 「五」＝「イツ」＝伊都（イツ）

「五瀬命」とは「伊都国の王（皇子）、名前を瀬」（伊都（イツ）の瀬）というのであろう。五瀬命の名前をみれば五瀬命が伊都国を代表する人物（王、皇太子）であることがわかる。

伊都国は一般に「イト国」と読まれている。しかし当時は「イツ国」と読まれていた。「都」は呉音で読むと「ツ」である。

	漢音	呉音
伊	イ	イ
都	ト	ツ

「伊都」は漢音で読むと「イト」であるが、呉音で読むと「イツ」である。天族は中国の呉地方の出自であり、呉音を使っていた。（古代史の復元①『倭人のルーツと渤海沿岸』参照）

「伊都（イツ）」という地名はもともと高天原（朝鮮半島南部）にあった。そこに「伊都之尾羽張神」という人がいた。

> 天照大神、ここに詔す「いづれの神を遣わさば吉（よ）けむ。」と。ここに思金神、及び諸神白（いわ）く、「天の安河の河上の石屋に座す、名は伊都之尾羽張神、これ遣わすべし。（後略）」という。『記』

伊都之尾羽張神は『紀』では稜威雄走神である。

■伊都之尾羽張神　＝　イツのおわばりかみ　　『記』
■稜威雄走神　　＝　イツのおはしりかみ　　『紀』

『紀』の「稜威」は「イツ」である。『記』の「伊都」も「イツ」であることがわかる。『記』は「都」を「ツ」の音として使っている。

「伊都（イツ）」は高天原（朝鮮半島南部）にあった地名である。そこから天孫降臨（移住）してきた人々が福岡県前原市に伊都（イツ）という地名をつけたのである。

『紀』にも「伊都」が出てくる。垂仁紀に「伊都都比古」とあり、「イツツひこ」と読ませている。

■伊都都比古　＝　イツツひこ　　『紀』

「伊都（イツ）の彦」という意味である。「伊都（イツ）つ比古」の「つ」は格助詞であり、「の」と同じである。

格助詞の「都」は「ツ」である。これを「都」＝「ト」と読むと「イトトひこ」となる。これでは意味が不明である。『紀』でも、「都」を「ツ」の音として使っている。伊都都比古とは「伊都国の王（皇子）」という意味であろう。伊都国の出自であると思われる。

このように『古事記』でも、『日本書紀』でも、さらには『万葉集』でも、「都」は「ツ」であり、「ト」ではない。

五瀬命は「伊都（イツ）瀬の命」であり、「伊都国の王（皇子）、名前を瀬」というのである。「神武東征」の出発地は伊都国（福岡県前原市）であることを五瀬命の名前は示している。

2　「神武東征」の時期と原因

(1)「東征」の目的

『紀』は「（神武）天皇、親（みずか）ら諸皇子・舟師を帥（ひき）いて東征す。」と書いている。この記事から「神武東征」は「征討」であると考えられてきた。

ところが『記』『紀』は「神武東征」の動機を次のように書いている。

> 塩土老翁（しおつちのおじ）に聞く、曰く「東に美しい土地がある。青山が四方にめぐっている。（中略）」という。（中略）蓋し六合（くに）の中心か。（中略）何ぞここに都をつくらざらむ。（中略）天皇、親（みずか）ら諸皇子・舟師を帥（ひき）いて東征す。　『紀』

「東に美しい土地がある」から、そこへ都を定めようと書いている。東征の目的は「東の美しい土地へ移ること」である。

『記』の方も次のように書いている。

> 神倭伊波禮毘古命（かむやまといわれひこ）、その伊呂兄（いろせ）五瀬命と二柱、高千穂宮に座して議（はか）りて云う、「何処の地に座（ま）さば平らけく天下の政（まつりごと）を聞（きこ）し看（め）さむ。猶、東に行かむと思う。」という。　『記』

神倭伊波禮毘古命（神武天皇）は兄の五瀬命と相談をする。「何処へ行けば天下を平安に治めることができるだろうか。東の方へでも行ってみようと思う」とある。現在の土地では「天下を平安に治めることができない」ので「どこか良い土地へ行って住もう」というのである。

東征の目的は『記』『紀』ともに「良い土地へ移ること」である。「移住」である。

ところが従来は「東征す。」とあるから「征討」であると考えた。「征討」とは「服従しないものを伐つこと」である。服従しない相手がいるはずである。しかし『記』『紀』には征討する対象（相手）の記述は無い。「征討」が目的ではないからである。

また征討であるならば必ず凱旋をするはずである。しかし神武天皇は凱旋をしないでただちに大和に住み着いている。移住だからである。

このように「神武東征」は「移住」であり、「征討」ではない。

(2) 伊都国の人口問題

伊都国王朝は弥生時代中期後半ころからはじまり、弥生時代終末まで継続している。弥生時代中期後半ころの王墓に三雲南小路遺跡があり、弥生時代後期の王墓に井原鑓溝遺跡がある。弥生時代終末頃の王（女王）墓には平原遺跡がある。伊都国は弥生時代終末（２世紀末）まで順調に継続している。「東征＝移住」が行われたとすれば３世紀以降であろう。

『三国志』によると伊都国は北部九州を支配している。対海国・一大国・奴国・不彌国に卑奴母離を派遣して支配・監視している。（古代史の復元②『伊都国と渡来邪馬壹国』参照）

『三国志』はこれらの国々の人口を次のように記録している。

- 対海国（対馬）　千余戸
- 一大国（壱岐）　三千許家
- 伊都国　千余戸
- 奴国　二萬余戸
- 不彌国　千余家

伊都国の人口は「千余戸」である。人口がもっとも少ない国の一つである。伊都国は『三国志』に「世々王有り」と書かれている。王の居る国である。しかも他の国々を支配している。何故、伊都国の人口はこのように少ないのであろうか。

『魏略』をみると伊都国の人口は「戸萬余」とある。伊都国の人口は「一萬余戸」である。

○伊都国の人口

■『魏略』 …… 戸萬余

■『三国志』…… 千余戸

『魏略』の「戸萬余」は伊都国の人口にふさわしい。伊都国の人口は一萬余戸あったのではないだろうか。

『魏略』は『三国志』よりも早く成立している。『魏略』が書かれた時点と『三国志』が書かれた時点とでは伊都国の人口に差があったのではないだろうか。

伊都国の人口は「萬余戸」から「千余戸」に減少したのであろう。戸数が１０分の１に激減している。住民の９割が居なくなっている。これが「神武東征＝移住」ではないだろうか。

「征討」であるならば住民の９割が居なくなることはない。兵士だけが出征するからである。住民の９割が伊都国を捨てて移住したのであろう。

『魏略』は「東征」以前の人口を書き、『三国志』は「東征（移住）」後の人口を書いているのではないだろうか。

３世紀の北部九州は「空白の３世紀」といわれている。目立った遺跡がない。３世紀の北部九州は廃れている。伊都国が移住したからであろう。

(3)　「東征」の時期

『魏略』は伊都国の人口を「戸萬余」と書き、『三国志』は「千余戸」と書いている。「東征＝移住」はこの間に起きていると思われる。

『三国志』倭人伝は２６６年の壹與の朝貢までを書いている。伊都国の人口はこの時にはすでに「千余戸」である。「東征」はこれ以前に起きている。

一方『魏略』には「女王之南、又有狗奴国。」と書いている。「女王」は女王国であり、邪馬壹国である。邪馬壹国は景初二年（２３８年）に魏王朝へ朝貢して「親魏倭王」となり、正式に倭国になっている。（古代史の復元②『伊都国と渡来邪馬壹国』参照）

『魏略』が書かれるとき、邪馬壹国がすでに倭国になっていたのであれば「女王之南」とは書かずに「倭之南」と書くはずである。「女王之南」となっているということは『魏略』は景初二年よりも前の時点のことを書いていることになる。『魏略』の「戸萬余」は景初二年（２３８年）よりも前の伊都国の人口である。

伊都国の人口が「千余戸」になるのは景初二年より後である。「神武東征」はこの間に行われたと思われる。「神武東征」の時期は２３８年から２６６年の間である。

(4)　「東征」の原因

「神武東征」（伊都国の移住）は何故起きたのであろうか。その原因を考えてみよう。

後漢時代の倭国は朝鮮半島南部にあった。２０５年頃、公孫康は朝鮮半島内を荒らし回る韓・濊を伐った。その時、韓の南にあった倭国も伐たれた。倭国の人々は公孫康の支配を嫌い北部九州へ逃げてきた。

北部九州には伊都国王朝があった。逃げてきた倭国の人々は伊都国王朝と戦い、勝利を収め、邪馬壹国を建国する。一大率を派遣し、伊都国および伊都国王朝の国々を支配した。（古代史の復元②『伊都国と渡来邪馬壹国』参照）

このようなときに卑弥呼が死んだ。その後男王が立つが国内は乱れる。

> 卑弥呼以死。大作冢。径百余歩。殉葬者奴婢百余人。更立男王、国中不服。更相誅殺。當時殺千余人。復立卑弥呼宗女壹與、年十三為王。国中遂定。　『三国志』
>
> （訳）卑弥呼は以て死す。大いに冢を作る。径百余歩。殉葬者は奴婢百余人。更に男王を立てるが、国中不服。更に相い誅殺す。時に當りて千余人を殺す。復た卑弥呼の宗女壹與、年十三を立てて王と為す。国中遂に定まる。

卑弥呼の死後、男王が立つが国中は不服とある。その後「更相誅殺」とある。「誅殺」とは「罪あるものを殺す」という意味である。「相誅殺」とは「互いに誅殺する」の意である。

従来は「国中がお互いに殺し合った」と解釈してきた。倭国の中の小国が争ったというのである。しかし「相」は「お互いに、それぞれが」という意味よりも、むしろ「AとBが向き合う」という意味である。「二者が向き合って互いに罪あるものを殺す」という意味である。その二者とは邪馬壹国と伊都国である。

邪馬壹国が朝鮮半島から渡来してきたときのことを『三国志』は次のように書いている。

> 倭国乱。相攻伐歴年。乃共立一女子為王、名曰卑弥呼。
>
> 『三国志』

「相攻伐歴年」とある。「相攻伐」したのは邪馬壹国と伊都国である。その結果邪馬壹国が勝利をおさめた。「相誅殺」はこの「相攻伐」と対応している。「相攻伐」と「相誅殺」は対になっている。「相誅殺」は邪馬壹国と伊都国が互いに相手を誅殺しようとしたという意味である。

伊都国は今は邪馬壹国に支配されているが、もともとは北部九州を支配していた。邪馬壹国に支配されるようになり、伊都国の人々は不満をもっていた。卑弥呼が死去すると不満は一気に爆発した。伊都国は覇権を取り戻すために邪馬壹国に戦いを挑んだのである。伊都国にとっては自分達が北部九州の支配者であるから邪馬壹国は「誅殺すべき罪あるもの」なのである。

一方、邪馬壹国にとっては北部九州を支配しているのは邪馬壹国である。邪馬壹国に背いた伊都国は反逆者である。反逆者は「誅殺」しなければならない。

これが「相誅殺」である。

「當時殺千余人（時に当たりて千余人を殺す）」とある。千余人を殺すという戦いは当時においては相当な殺戮である。伊都国と邪馬壹国は激しく戦っている。

その結果、「復立卑弥呼宗女壹與、年十三為王、国中遂定」とある。壹與が王となり、国中は遂に定まったとある。またもや邪馬壹国の勝利に終わっている。

伊都国は敗北した。今回の反逆で邪馬壹国の支配はさらに強化されるであろう。伊都国は逃げ出すことを決意した。これが「神武東征」である。伊都国の人々は伊都国を捨てて新天地を求めて出て行った。「移住」であり、「逃亡」である。「神武東征」は「神武逃亡」である。

その時期は、卑弥呼が死去（２４７年頃）して男王が立ち、「相誅殺」の後、邪馬壹国が勝利する。その後に壹與が即位して２６６年に朝貢する。したがって東征の出発はこの間であろう。「神武東征」の出発は２５０年－２６５年頃である。

神武東征の出発の時期　……　２５０年－２６５年頃

第２章　神武東征のルート

1　北部九州のルート

(1) 速水之門

神武天皇は伊都国（福岡県前原市）を出発するとすぐに速吸之門に至る。

> 天皇、親（みずか）ら諸皇子・舟師を帥いて東征す。速吸之門に至る。時に一漁人有り。艇に乗りて至る。天皇これを招（め）して問いて曰く、「汝は誰ぞ」。対（こた）えて曰く、「臣は国神なり。名は珍彦（うずひこ）という。（中略）」。
> 又問いて曰く、「汝は能（よ）く我がために導かむや」と。対えて曰く、「導かむ」。（中略）行きて筑紫国の菟狭に至る。　『紀』

出発するとすぐに速吸之門に至るとある。従来は出発地を宮崎県であると考えたので、「速吸之門」は九州と四国の間にある豊予海峡であるとしてきた。

ところが『記』の方は吉備（岡山県）を過ぎてから速吸之門に至るとある。

> 日向より発して筑紫へ行く。（中略）其の地より遷移（うつ）りて竺紫之岡田宮に一年座（ま）しき。亦其の国より上（のぼ）り幸（ゆ）きて阿岐国の多祁理（たけり）宮に七年座しき。亦其の国より遷り上り幸きて吉備の高嶋宮に八年座しき。
> 故、其の国より上り幸くとき亀の甲に乗り、釣りを為しつつ、羽を打ち挙げて来る人と速吸門に遇う。ここに喚び帰（よ）せて、汝は誰ぞと問う。答えて曰く、「僕（あ）は国神なり」。また問う、「汝

は海道を知れりや」。答えて曰く、「よく知れり」と。（中略）故、其の国より上り行く時、浪速の渡りを経て青雲の白肩津に泊まる。

『記』

吉備（岡山県）の高嶋を過ぎてから「速吸門」に来ている。「速吸門」は『紀』の「速吸之門」であろう。速吸門は明石海峡あたりであろうといわれている。速吸之門（速吸門）の位置が『記』と『紀』で異なる。

『記』では、その後速吸門から浪速（大阪）を経て日下へ行く。日下は東大阪市日下町であろうといわれている。内陸にある。したがって海道は大阪（浪速）で終る。速吸門が明石海峡付近であるとすれば明石海峡から大阪は近い。明石海峡まで来ればもはや海道を知る人（海導者）は必要ない。

速吸門が九州であれば、これから長い航海が始まる。海導者は必要である。神武天皇は「海導者」を喜んで迎え入れている。それは速吸門が九州だからであろう。速吸門の位置は『紀』の方が正しいと思われる。

本居宣長は『古事記伝』の中で、速吸門から浪速へ行く記事の中に「故、其の国より上り行く時」とあるのはおかしいと指摘している。

「従其国（其の国従（よ）り）」……上（前の文章）には只速吸門の事を云るのみなれば、此（ここ）に其国と指すべき処は無し、いかが。上の段の次第の乱れつるから、かかることもあるにやあらむ。

『古事記伝』

「其の国より」とあるが、その前に書かれているのは速吸門である。速吸門は国ではない。それを「其の国」と指しているのはおかしい。おそらくその前の次第（順序）が間違っているのであろうと述べている。

『記』の記述を箇条書きにすると次のようになる。

■ａ．日向より発して筑紫へ幸行く。
■ｂ．故、豊国の宇沙に到る時、……。
■ｃ．其地より遷移りて、竺紫の岡田宮に一年座しき。
■ｄ．亦其国より上り幸きて阿岐の多祁理宮に七年座しき。
■ｅ．亦其国より遷り上り幸きて吉備の高嶋宮に八年座しき。
■ｆ．故、其国より上り幸きし時、亀の甲に乗り、（中略）来る人に速吸門で遇う。……。
■ｇ．故、其国より上り行く時、浪速の渡りを経て、……。

本居宣長はｇの「其国」がおかしいと指摘している。その前のｆは「速吸門」であり国ではないからである。

箇条書きをみるとほとんどが「其地より」、「其国より」となっている。ｂだけは異なり、「故」と書いているだけである。ｃ、ｄ、ｅ、ｇは入れ替えても文章は成り立つ。ただｆの速吸門の記事だけはｂよりも後にあると、次の文章は「速吸門」を「其国」や「其地」と指すことになるのでおかしくなる。ｆの記事はｂの前にあればよい。

■ａ．日向より発して筑紫へ幸行く。
■ｆ．故、其国より上り幸きし時、亀の甲に乗り、（中略）来る人に速吸門で遇う。……。
■ｂ．故、豊国の宇沙に到る時、……。

出発すると速吸門に至ることになる。これは『紀』の記述と一致する。

『古事記』の編纂者はｆを挿入する位置を間違えたのではないだろうか。筑紫の日向を出発するとすぐに「速吸之門」に至る。これが正しいのであろう。

(2) 橘小門

速吸之門は『紀』の神代紀にも出てくる。伊弉諾尊（いざなきのみこと）は死去した伊弉冉尊（いざなみのみこと）に会いに黄泉（よみ）の国へ行き、追われて逃げて帰る。

> 親（みずか）ら泉国（よみのくに）を見る。此れ既に不祥。故、其の穢悪（けがれ）を濯ぎ除かんと欲す。乃ち往きて粟門（あわのみと）及び速吸名門（はやすいなと）を見る。然るに此の二門は潮の流れがはなはだ急なり。故、橘の小門（おど）へ還りて払い濯ぐ。
>
> 『紀』第五段一書第十

「速吸名門」は「速吸の門」であり、「速吸之門」であろう。伊弉諾尊（いざなき）は黄泉（よみ）の国（死者の国）へ行ったので汚れた身体を禊（みそ）ぎしようと粟門および速吸名門へ行く。ところが潮の流れが速いので引き返して橘の小門で禊ぎをしたという。

橘の小門（おと）は第五段一書第六にも出てくる。

> 則ち往きて筑紫の日向の小戸の橘の檍原（あはきはら）に至り、祓（みそ）ぎ除（はら）いたまう。　　『紀』第五段一書第六

禊ぎをしたところは「筑紫の日向の小戸の橘の檍原」とある。「橘の小門（小戸）」である。

「橘の小門」は「筑紫の日向」にあるという。筑紫の日向は天孫降臨の地（福岡市西区）である。地図を見ると福岡市西区の姪浜の西北に今も「小戸」がある。「橘の小戸（小門）」であろう。

速吸名門（速吸之門）は流れが急だったので引き返して橘の小戸で禊ぎをしたとある。速吸名門は小戸の近くにある。

「筑紫の日向」は神武東征の出発地である。東征に出るとすぐに速吸名門（速吸之門）に至るとある。速吸之門は伊都国（糸島半島）の近くにある。「潮の流れが急」とあるから玄界灘であろう。糸島半島から玄界灘に出たところが「速吸之門」であろう。

伊奘諾尊は速吸之門まで来たが流れが速かったので引き返して小戸へ来ている。最初は小戸（博多）方面から糸島半島に沿って速吸之門まで来たのであろう。潮の流れが速かったので橘の小戸へ引き返している。図示すると次のようになる。

図２　神武東征の出発地と速吸之門

図３　伊奘諾尊のルートと速吸之門

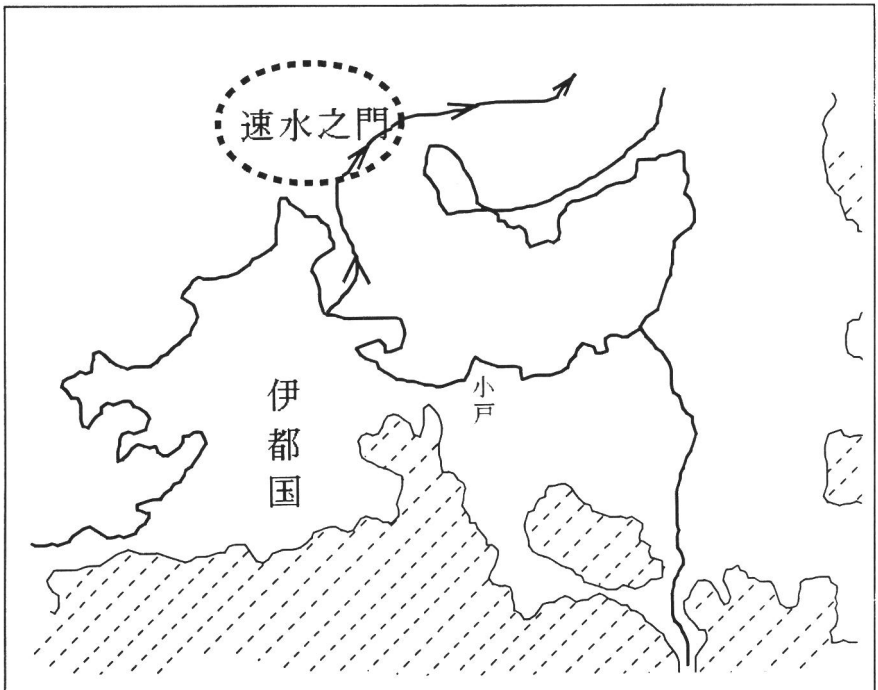


図２　神武東征の出発地と速吸之門

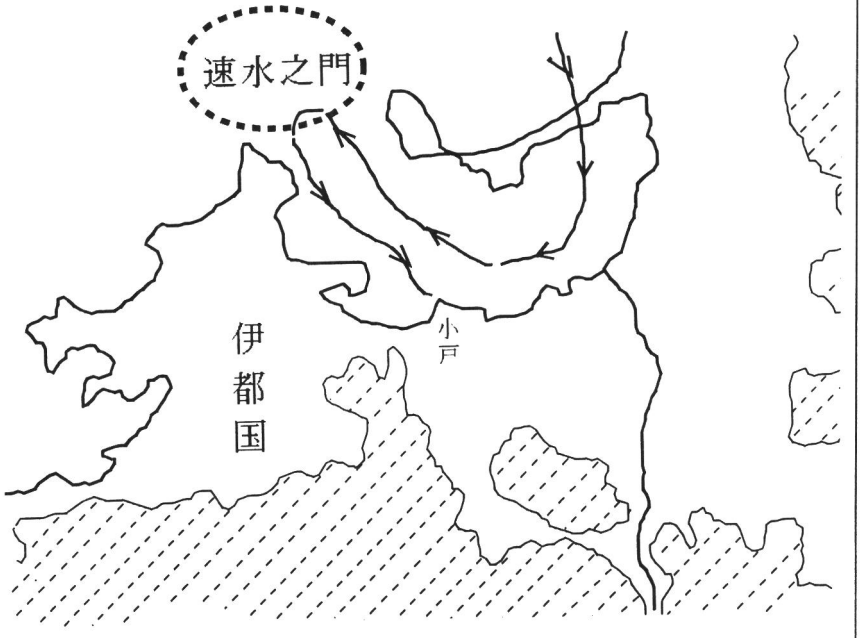


図３　伊奘諾尊のルートと速吸之門

(3) 筑紫の菟狭（うさ）

筑紫の日向を出発して菟狭へ行く。『紀』は「筑紫国の菟狭（うさ）に至る」と書いている。ところが『記』には「豊国の宇沙に到る」とある。「菟狭」は「宇沙」であろう。『記』と『紀』で菟狭（宇沙）の位置が違う。

■筑紫国菟狭　……　『紀』
■豊国宇沙　……　『記』

従来は、東征の出発地「日向」は宮崎県であるとしてきたので『記』の「豊国の宇沙」を採用して「宇沙」は大分県宇佐市であろうとしている。

しかし、東征の出発地は筑紫の日向であり、福岡県前原市である。前原市を出発して「豊国の宇沙」へ行くはずはない。

しかも菟狭の次は、『紀』は「筑紫国の岡水門（おかのみなと）に至る。」と書いている。『記』も「竺紫之岡田宮」とある。どちらも「筑紫」である。

■天皇、至筑紫国岡水門。　……　『紀』
■於竺紫之岡田宮、一年座。　……　『記』

岡水門（岡田宮）は福岡県遠賀郡の遠賀川の川口付近であろうといわれている。

『記』の記述に従えば、福岡県前原市（日向）を出発して、大分県の宇佐へ行き、引き返して遠賀川の川口に来ることになる。そのような無駄な行動をするはずはない。『記』の「豊国の宇沙」は間違いであろう。

「筑紫の日向」を出発して、菟狭へ行き、その後「筑紫」の岡水門（岡田宮）へ行く。筑紫の日向を出発してまだ「筑紫」の中に居る。筑紫から外へは出ていない。菟狭（宇沙）はやはり『紀』の「筑紫の菟狭（宇沙）」であろう。

『記』は「豊国の宇沙」と書いているが、「豊国」という「国」が制定されるのは大宝令か、その直前のころであり、７０１年前後である。東征の時期（３世紀）にはまだ「豊国」という国はなかった。

（注）『三国志』に「ＸＸ国」と書かれているが、統一国家により制定された国ではない。日本にはまだ統一国家は誕生していない。

伝承では「宇佐」だけであり、「豊国の」は付いていなかったはずである。『古事記』の編纂者が編纂時（７１２年）に「豊国の」を付け加えたのであろう。

(4) 菟狭とは

筑紫の菟狭から岡水門（岡田宮）へ行く。岡水門は福岡県遠賀郡の遠賀川の川口である。出発地は福岡県前原市（日向）であるから菟狭は前原市と遠賀川の中間にあるはずである。

『紀』の神代紀に「宇佐嶋」が出てくる。日神（天照大神）と素戔嗚尊（すさのおのみこと）が和解の誓約として子を生む場面である。

> 日神、先ずその十握剣を食して生まれた子は瀛津嶋姫命（おきつしまひめ）、亦の名は市杵嶋姫命（いつきしまひめ）。また九握剣を食して生まれた子は湍津姫命（たぎつひめ）。また八握剣を食して生まれた子は田霧姫命（たぎりひめ）。（中略）日神の生みし三女神を以て葦原中国の宇佐嶋に降り居さしむ。今、海北道中に在り。号して道主貴（みちぬしのむち）という。　　『紀』

「宇佐嶋」が出てくる。「今は海北道中に在り」とある。海北道中とは北部九州から朝鮮半島へ行く海上の道をいう。その海上の道に宇佐嶋があるという。宇佐嶋は沖の島であろうといわれている。「宇佐嶋（沖の島）」が「菟狭（うさ）」ではないだろうか。

宗像大社は辺津宮・中津宮・沖津宮の三社からなる。辺津宮は宗像郡玄海町にあり、市杵島姫神を祀る。中津宮は海上１２ｋｍにある大島にあり、湍津姫神を祀る。沖津宮は大島からさらに海上５０ｋｍの沖の島にあり、田心姫神を祀る。

『紀』は三女神を宇佐嶋に住まわせたとある。今も沖の島には三女神の一人が祀られている。しかも沖の島は海北の道にある。名前も菟狭＝宇佐である。菟狭は宇佐嶋であり、沖の島であろう。

あるいは「三女神を宇佐嶋に降り居さしむ」とあるから、「宇佐嶋」は沖ノ島だけではなく、中津宮のある大島も「宇佐嶋」といわれるのかもしれない。伊都国から岡水門へ行くには大島を通るのが自然である。「菟狭（宇佐）」の候補地としては大島と沖ノ島の２つがある。

神武天皇は天族であり、天照大神の子孫である。宗像の三女神も天照大神が生んでいる。どちらも天照大神の子孫である。神武天皇は東征への出発にあたり大島（宇佐嶋）へ立ち寄り、航海の安全と、戦勝祈願をしたのであろう。

(5) 北部九州ルートのまとめ

岡水門（岡田宮）から安芸国へ行く。

■至安芸国、居于埃宮。　『紀』
（訳）安芸国に至り、埃宮（えのみや）に居す。

■於安岐国之多祁理宮、七年座。　『記』
（訳）安岐国の多祁理宮（たけりみや）に七年座（い）ます。

安芸国（安岐国）は広島県である。
出発してから安岐国までの東征のルートは図のようになる。
図４　神武東征のルート（北部九州）

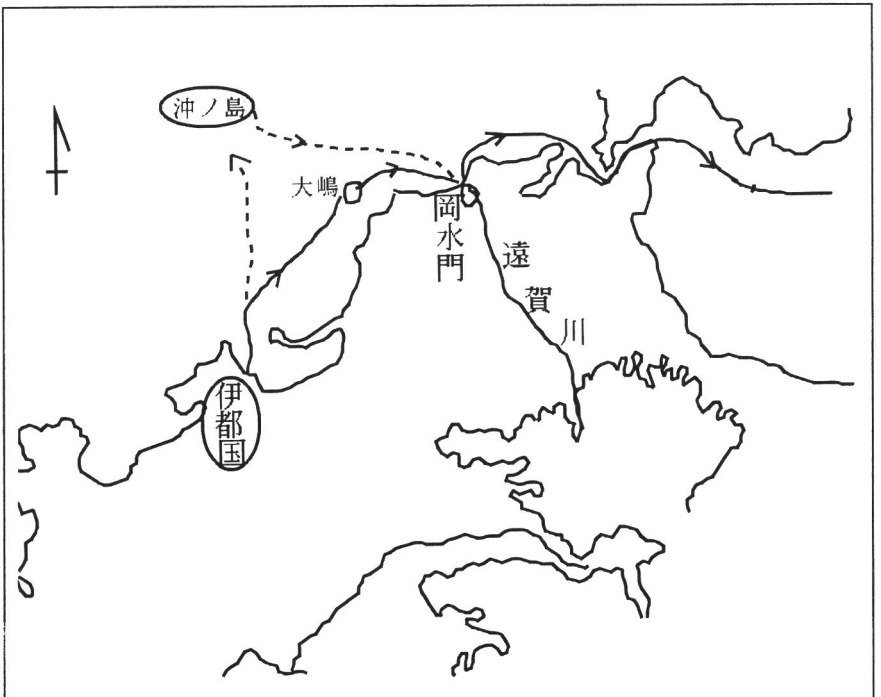


図４　神武東征のルート（北部九州）

2　大阪のルート

(1) 吉備の高嶋

安芸国から吉備国へ行く。

■徙入吉備国。起行館以居之。是曰高嶋宮。積三年間、脩舟檝、蓄兵食。
『紀』

（訳）徙（うつ）りて吉備国に入る。行館（かりみや）を起（た）てて居す。これを高嶋宮という。三年を経る間に舟を修め、兵食を蓄える。

■亦従其国遷上幸而、於吉備之高嶋宮、八年座。　『記』

（訳）また其の国より遷り上り往きて吉備の高嶋宮に八年座ます。

『記』『紀』ともに吉備国の高嶋宮に留まるとある。今の岡山市高島であろう。

『紀』では三年、『記』では八年留まるとある。この間に舟を整え、兵の食料を蓄えている。そして次へ進む。

皇師遂東。舳艫相接。方到難波之碕、會有奔潮太急。因以、名為浪速国。亦曰浪花。今謂難波訛也。　『紀』

（訳）皇師、遂に東へ進む。舳艫（ともとへさき）が相接す。まさに難波の岬に到り、奔（はや）い潮があり、はなはだ急なのに会う。因りて浪速国と為す。また浪花という。今は難波と謂う。訛（よこなま）れるなり。

神武天皇の一行はこうして吉備（岡山県）から難波（大阪）へ来る。

(2) 草香（日下）

難波から河内の日下（くさか）へ入る。

■ 遡流而上、径至河内国草香邑青雲白肩之津。　『紀』
（訳）川を遡（さかのぼ）りて、ただちに河内国の草香邑の青雲の白肩津に至る。

■ 経浪速之渡而、泊青雲之白肩津。此時、登美能那賀須泥毘古、興軍待向以戦。爾取所入御船之楯而下立。故、號其地謂楯津。於今者日下之蓼津也。　『記』
（訳）浪速の渡りを経て青雲の白肩津に泊まる。この時、登美の那賀須泥毘古（ながすねひこ）が軍を興し、待ち向かい戦う。ここに御船に入れていた楯を取りて下りて立てる。故、其の地を楯津という。今は日下（くさか）の蓼津（たでつ）というなり。

東大阪市に日下町がある。草香（日下）はここであろうといわれている。

ところが日下は生駒山の西麓にあり、陸地である。船で来れるようなところではない。本居宣長は次のように指摘している。

「遡流而上（カハヨリサカノボリテ）」と云ることいと心得ず。草香はたとひ河内の草香にしても難波より遡流て至る処にあらず。甚だ地理にたがえり。　『古事記伝』

本居宣長は、河内の草香は難波より川を遡っていくような処ではない。地理とは大きく異なっていると述べている。地図を見ても難波から日下町へ行く川はない。本居宣長の言うとおりである。

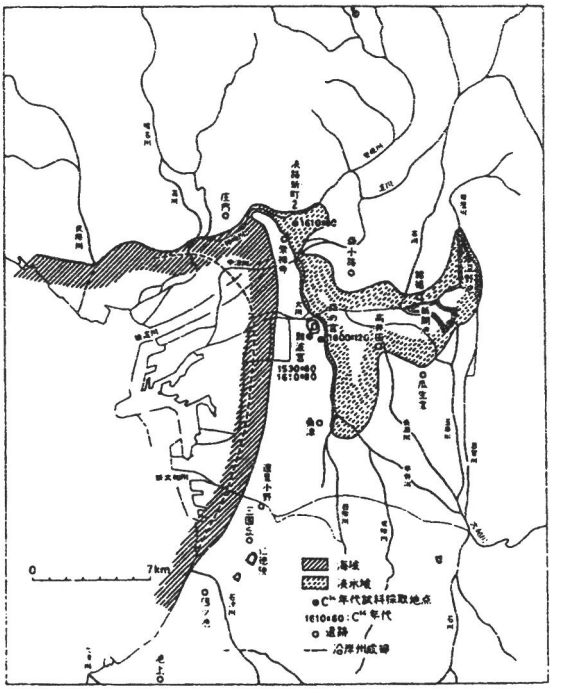
ところが古代には河内湖があったという。『大阪府史 第一巻』に梶山彦太郎・市原実両氏の研究論文（『地質学論集』第７号、１９７２年）が引用されている。それによると後氷河期の大阪平野は九つの時代に区分されるという。

①古大阪平野の時代　（約２万年前－９０００年前）
②古河内平野の時代　（約９０００年前）
③河内湾Ⅰの時代　（約７０００－６０００年前）
④河内湾Ⅱの時代　（約５０００－４０００年前）
⑤河内潟の時代　（約３０００－２０００年前）
⑥河内湖Ⅰの時代　（約１８００－１６００年前）
⑦河内湖Ⅱの時代　（１６００年以後）
⑧大阪平野Ⅰの時代
⑨大阪平野Ⅱの時代

神武東征は２５０－２６５年頃であるから今から約１７００年前である。「⑥河内湖Ⅰの時代」にあたる。河内湖Ⅰの時代について『大阪府史』は次のように書いている。

> 河内湖Ⅰの時代というのは、弥生時代後期から古墳時代前期に相当する。この時代の自然史については、梶山・市原両氏は次のように述べている。
> 淡路新町－２のデータは、約１６００年前にはすでに河内平野側が完全な淡水湖に移り変わっていたことを示している。天満・長柄から北方にのびる砂州は北に延びきって、河内の湖への海水の侵入をさえぎった。淀川と大和川の水をあわせた河内の湖の水は、庄内の東方で現在の神崎川ぞいの水路をとおって大阪湾に流入していたと推定される。（中略）この湖を河内湖と名づけ、この時代を河内湖Ⅰの時代とよぶことにする。

図５　河内湖Ｉの時代の古地理図　（『地質学論集』より）

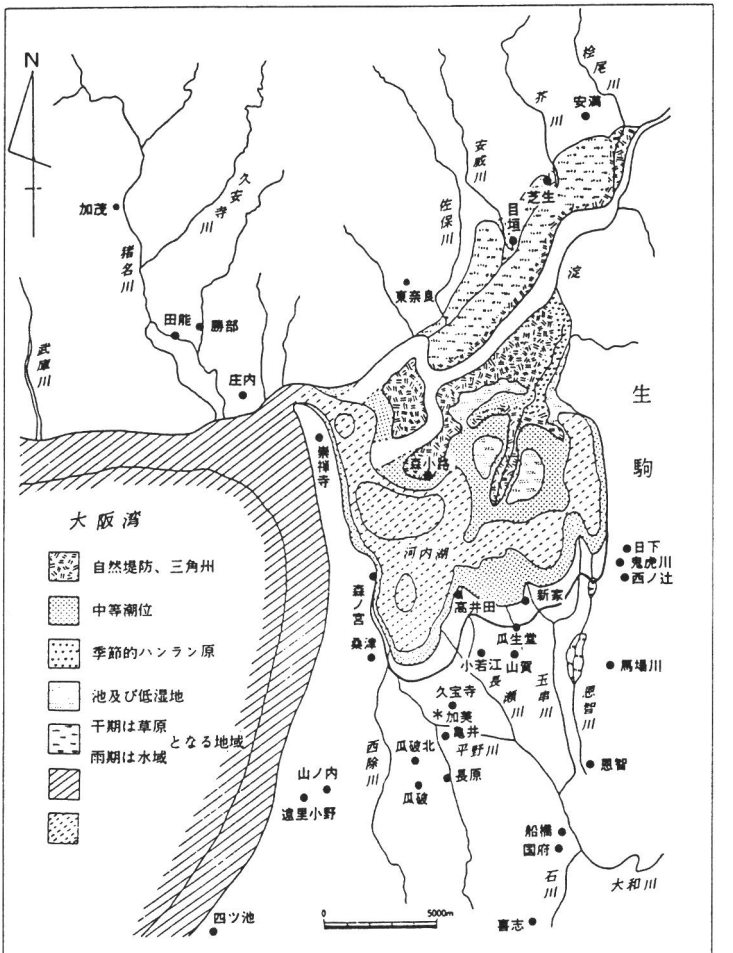


河内湖Ｉの時代（約1800～1600年前，弥生時代後期～古墳時代前期）の古地理図

図５　河内湖Ｉの時代の古地理図　（『地質学論集』より）

『古代史を歩く⑦　河内』（毎日新聞社）に「河内湖Ｉの時代の古地理図」をもとにして作成した主要遺跡分布図がある。

図６　河内湖の主要遺跡分布図　（『古代史を歩く⑦　河内』より）



『続大阪平野発達史』（梶山、市原1985）の図
河内潟の時代（約3000～2000年前）および河内湖Ⅰの時代
（約1800～1600年前）より　　一部加筆

図６　河内湖の主要遺跡分布図

この遺跡分布図の右側に「日下」がある。ここが草香（日下）である。河内湖の岸にある。大阪から日下へは船で行けることがわかる。

『紀』は船で「ただちに河内国の草香邑（日下）の青雲の白肩津に至る。」と書いている。河内湖が存在したからである。弥生時代の地理が『記』『紀』に正確に反映している。『記』『紀』の記述は正確であることを地質学が証明している。

(3) 長髄彦との戦い

日下から生駒山を越えようとして長髄彦（ながすねひこ）と戦う。

> 皇師、兵を勒（ととの）へて歩いて龍田へ趣（おもむ）く。その路は狭く険しい。人が並んで行くことができない。乃ち還りて更に東へ生駒山を越えようとする。時に長髄彦、聞きて曰く、「天神の子等が来たのは必ず我が国を奪うためであろう」。　『紀』

神武天皇の一行は長髄彦と戦う。「孔舎衛坂（くさえさか）において戦う」とある。この戦いで五瀬命は流れ矢にあたり負傷する。「皇師、進み戦うことあたわず」とある。一行は逃げる。河内湖を出て大阪湾に沿って和歌山へ向かう。

図７　大阪ルート

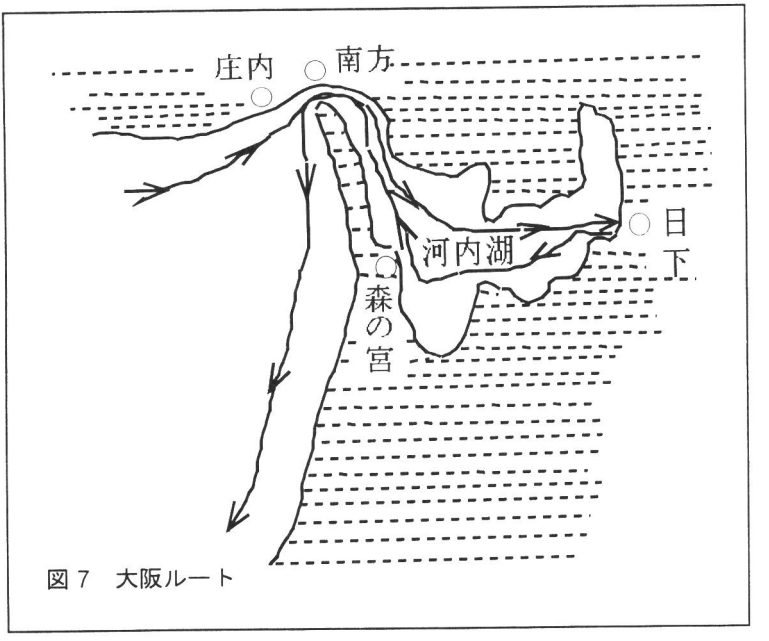


図７　大阪ルート

3　和歌山のルート

(1) 竈山

五瀬命は流れ矢による負傷がもとで死去する。

軍は茅渟（ちぬ）の山城の水門に至る。時に五瀬命は矢の瘡（きず）の痛みが甚だしい。乃ち剣を撫（ぶ）して雄諾（おたけび）して曰く、「慨（なげ）かわしいかな。大丈夫でありながら虜（あた）の手によって傷を被（こおむ）り、報いずして死なんとす。」という。時人、因りて其の処を号して雄水門（おのみなと）という。
進みて紀国の竈山に到る。五瀬命、軍において薨（みまか）る。因りて竈山に葬す。　『紀』

河内湖から逃げてきて茅渟の山城の水門（大阪府和泉市の海岸）を通り、雄水門（和歌山市の海岸）へ来る。ここで五瀬命は死去し、和歌山市の竈山に埋葬されたという。『記』にも次のように書いている。

南方より廻り幸（ゆ）きし時、血沼（ちぬ）海に到り、其の御手の血を洗う。故、血沼海という。其の地より廻り幸きて、紀国の男之水門（おのみなと）に到り、詔す、「賤（いや）しき奴の手に負いてや死なむ」と男建（おたけび）して崩ず。故、其の水門を男水門という。陵は紀国の竈山に在り。　『記』

「南方より廻り幸（ゆ）きし時」とある。「南方」は「みなみかた」であろう。新大阪駅の近くにある。阪急京都線に「南方」駅がある。この時期には上町台地の砂洲が発達し、対岸の「南方」近くまで延びている。

図７　大阪ルート（参照）

河内湖から大阪湾へ出るには「南方」の近くを廻ることになる。「南方より廻り幸（ゆ）きし時」とあるのは当時の地理によく合っている。

大阪湾から和歌山市へ来る。名草山の北の和田川に近いところに竈山神社がある。ここに「彦五瀬命の墓」がある。ここが竈山であろう。

図８　和歌山ルート

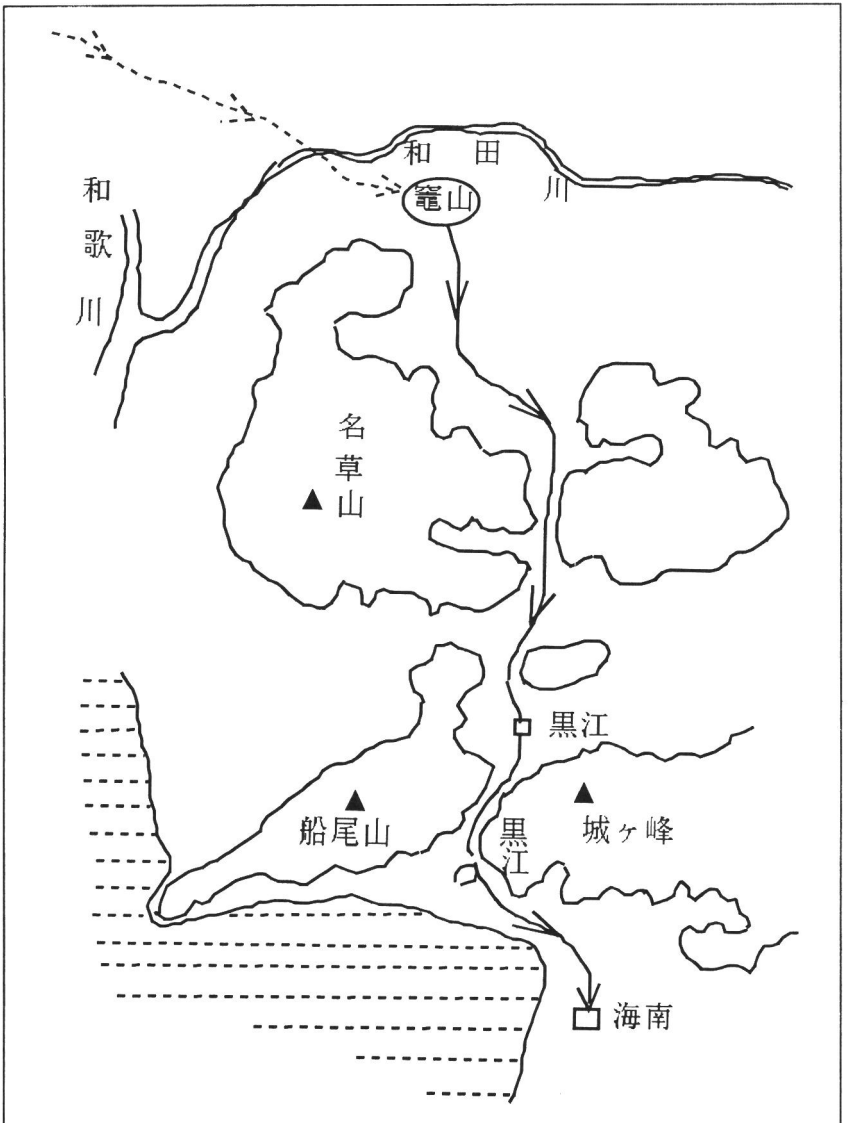


図８　和歌山ルート

(2) 「吉野河の河尻」

名草邑から熊野へ向かう。

> 因りて竈山に葬す。軍、名草邑に至る。則ち名草戸畔（なくさとべ）という者を誅（ころ）す。遂に狭野を越えて熊野の神邑に到る。且つ天の磐盾に登る。よりて軍を引きいて漸く進む。　『紀』

ここで二人の兄が入水自殺する。

> 海中で卒（にわか）に暴風に遇う。皇舟は漂蕩（ただよ）う。時に、稲飯命（いなひのみこと）乃ち歎（なげ）きて曰く、「嗟乎（ああ）、吾が祖は天神、母は則ち海神。如何にぞ、我れを陸に厄（たしな）め、復（ま）た我れを海に厄（たしな）むや」。言い訖（おわ）りて、乃ち剣を抜いて海に入り、鋤持神（さいもちかみ）と化為（な）る。
>
> 三毛入野命（みけいりのみこと）、亦恨みて曰く、「我が母、及び姨（おば）は是れ海神。何（いかに）ぞ波瀾（なみ）を起こし、淹溺（おぼほ）すや」といい、則ち浪の秀（すえ）を踏みて、常世（とこよ）郷へ往く。　『紀』

次男の稲飯命は海中で暴風に遭い、「我が祖は天神であり、母は海神であるのに、何故我を陸で災難に遭わせ、また海でも災難に遭わせるのか」と嘆き、遂に海に飛び込み自殺する。

三男の三毛入野命も暴風雨に遭い、「母も姨も海神であるのに何故波を起こして溺れさせようとするのか」といい、やはり入水自殺する。

『紀』は続けて次のように書いている。

> 天皇独り、皇子手研耳命（たぎしみみ）と、軍を帥（ひき）いて進み、熊野の荒坂津へ至る。因りて丹敷戸畔（にしきとべ）という者を誅（ころ）す。
> 時に神毒気を吐く。人物はみな瘁（お）えぬ。是により皇軍はまた振（ふる）いたつことあたわず。時に彼処（そこ）に人有り。号して熊野の高倉下（たかくらじ）という。　『紀』

熊野の神邑から熊野の荒坂津へ来る。ここで毒気にあたり、皆おえたとある。

『記』の方は次のように書いている。

> （五瀬命の）陵は紀国の竈山に在り。故、神倭伊波禮毘古命、其の地より廻り幸きて熊野村に到る時、大熊出て、失せぬ。ここに神倭伊波禮毘古命、にわかに遠延（おえ）となり、御軍は皆おえて伏しぬ。この時、熊野の高倉下、一横刀をもち、（後略）　『記』

『記』『紀』ともに、熊野まで来て力が尽きた（おえた）とある。そこへ熊野の高倉下が来て、夢のお告げとして刀を献上する。これにより一行は力を得て進むことができたという。

次に熊野から宇陀へ行く。

- 遂に菟田（うた）下縣に達す。因りて其の至る所を号して菟田の穿邑（うかちむら）という。　『紀』
- 其の八咫烏（やたからす）の後に従い幸行く。吉野河の河尻に到る時、筌（うえ）を作り、魚を取る人有り。（中略）其の地より踏み穿（うか）ち越えて宇陀に幸す。故、宇陀の穿（うかち）という。　『記』

熊野から奈良県宇陀郡へ来ている。

『記』は熊野村から「吉野河の河尻に到る」と書いている。熊野から吉野川へ出て、そこから宇陀へ向かっている。

通説では、『紀』の熊野の神邑は和歌山県新宮市に比定している。ここには熊野神社がある。熊野の荒坂津は「亦の名は丹敷浦（にしきうら）」とある。三重県度会郡紀勢町錦に比定している（本居宣長説）。

図９　従来の神武東征のルート（熊野）

（『神武東征』（中公新書）より）

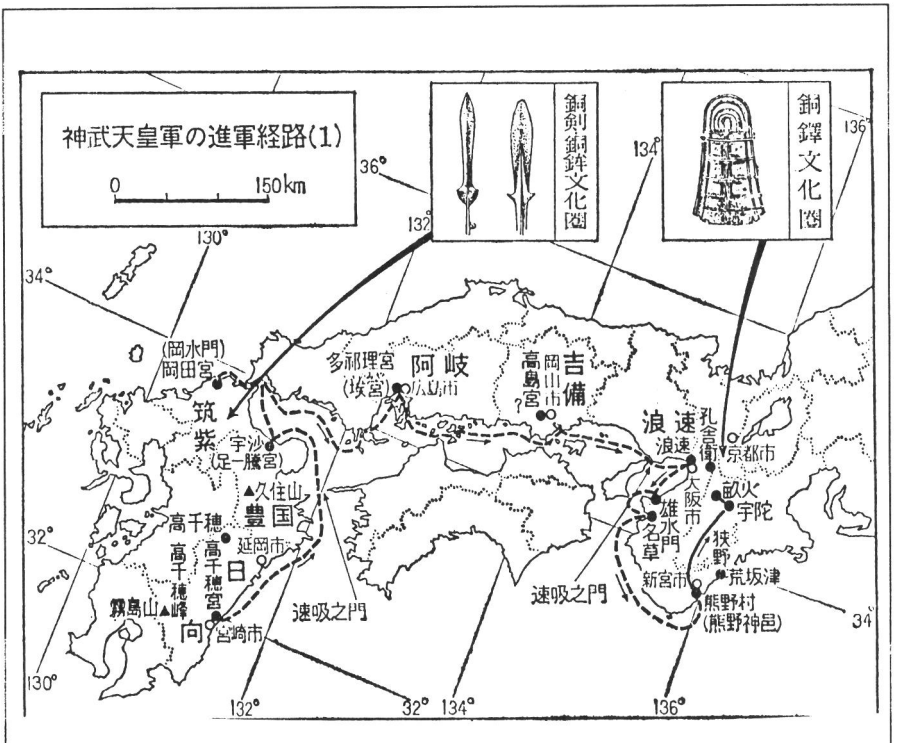


図９　従来の神武東征のルート（熊野）

しかしこのルートは地理的におかしい。本居宣長は『古事記伝』の中で次のように指摘している。

> 「河尻」……書紀仁徳ノ巻に流末（カワジリ）ともあり。さてまづ吉野河は、源は遥かに東方の山奥、大台ヶ原という処より出て、川上荘というを歴て流れ出るなり。さて下は宇智郡へ流れ、紀ノ国の伊都・那賀・名草の三郡を歴て海に入る。さて今熊野より山越えに、幸行て、吉野へ出たまはむ地は、なほ川上というべきあたりにこそあらむを、河尻としもいえるは、地理を考えるに違えるがごとし。
>
> 『古事記伝』

『記』には「吉野河の河尻に到る」とある。熊野の荒坂津（三重県錦）より吉野へ行けば吉野川の川上に到るはずである。それを「河尻に到る」とあるのはおかしい。本居宣長はこのように指摘している。

『広辞苑』にも「川尻……①川しも、②川ぐち」とある。吉野川は奈良県での名前であり、和歌山県に入ると紀ノ川となる。「吉野川の河尻」とは、吉野川の下流（川下）である。熊野の荒坂津（三重県錦）から吉野川へ出るのに川下へ来るはずはない。

(3) 熊野とは

『紀』は、名草から「狭野を越えて熊野の神邑に到る」とある。名草から陸路で熊野へ来ている。その後「海中にて卒（にわか）に暴風に遇う。」とあり、二人の兄（稲飯命・三毛入野命）の入水自殺記事がある。その記事の後に「軍を帥いて進み、熊野の荒坂津に至る」とある。「熊野の神邑」から「熊野の荒坂津」へ来ている。

熊野の荒坂津は「亦の名は丹敷浦」とあるので海岸であろう。ここで「熊野の高倉下」が出てくる。すべて「熊野」の中での話である。

二人の兄の入水自殺記事がその間に挿入されている。船に乗っているのは二人の兄だけではないだろうか。従来は、神武天皇も二人の兄と一緒に船に乗っていると解釈してきた。そのため熊野の神邑から熊野の荒坂津まで船で行ったと解釈してきたのである。

しかしその前後の記事はすべて「熊野」であるから神武天皇はずっと熊野に居たのではないだろうか。神武天皇は船には乗っていないと思われる。

『宮下文書』をみると、「（皇太子＝神武天皇は）皇兄稲飯王命・三毛入野王命をして海浜を守らしめ、親ら諸皇弟皇子を従え……。」とあり、兄二人とは別行動をしている。兄の稲飯王命と三毛野入野王命は船に乗って敵と戦う。

> 高座日多命・稲飯王命・三毛野入野王命は皇軍を率いて進み給う。（中略）稲飯王命・三毛野入野王命は、春加々真津命三将と、曽根の水門に軍船六艘を艤装して、将に錦水門に白木の賊軍を攻めむとし給う。（中略）翌朝黎明、七艘の軍船を集めて三木浦及び錦浦を望みしに、白木の軍船影跡たになし。稲飯王命、憤怒して（中略）諸軍続けと言い捨て、一艘の龍船に打ち乗り、疾電の如くそ追い行きける。三毛野入野王命初め、春加々真津命外三将、二千餘の強兵を五艘に分乗して、稲飯王命の後に従う。（中略）津久島沖の海原にて白木の賊船にぞ追いつきける。（中略）流れ矢飛ぶこと雨霰の如し。（中略）周国の白木兵を援はんとして、舳艫千里海を蔽ひ、（中略）三毛野入野王命、これを見て、天神地祇を祈りて、亦神剣を打ち振り天を拝して、頭上に捧げて、大海に投しましぬ。（中略）我軍惣大将稲飯王命初め、三毛野入野王命・春加々真津命・御雷折彦命・忌部若道命等、並びに強兵二千五百神皆沈滅し給う。
>
> 『宮下文書』

二人の兄、および将軍、兵二千五百は船に乗り、敵軍と戦い戦死している。神武天皇はこの戦いに参加していない。二人の兄とは別行動をしている。

『紀』の二人の兄の入水自殺記事は神武天皇の行動の間に挿入されているだけである。

神武天皇は名草から陸路で熊野へ来ている。「狭野を越えて熊野の神邑に到る。」とある。そこから「熊野の荒坂津」に来ている。名草からずっと陸路である。

海岸へ出たという。名草から行く海岸は海南市であろう。名草山の東を南下して黒江を通ると海南市の海岸へ出る。黒江は二つの山（船尾山と城ヶ峰）の間にある。これが「狭野＝狭い平野」ではないだろうか。「狭野を越えて」とあるのは山と山の間の狭いところを越えてという意味であろう。熊野は海南市である。

図８　和歌山ルート（参照）

熊野は仁徳紀にも出てくる。

> 三十年、皇后、紀国に遊行す。熊野岬に到る。即ち其の処の御綱葉（みつなかしは）を取り、還る。　『仁徳紀』

仁徳天皇の皇后は難波から紀国の熊野岬へ「遊行」するとある。遊びで木の葉を摘みに来ている。

熊野（岬）が新宮市であるならば新宮市は太平洋に面している。太平洋は荒波であり、とても危険である。遊びで行くようなところではない。

海南市は太平洋の荒波も穏やかになるところにあり、「遊行」するには適している。熊野はやはり海南市であろう。

(4) 熊野から紀ノ川へ

熊野（海南市）から「吉野河の河尻に到る」とある。海南市から吉野川へ出るには地形からみて紀ノ川へ出て遡るしかない。それには名草へ戻り和歌山市から紀ノ川を遡るか、あるいは東へ進み、貴志川を下って紀ノ川へ出ることになる。

『記』『紀』には名草へ戻るという記述がないので貴志川を下ったのであろう。海南市から東へ進み、貴志川を下り、紀ノ川へ出る。そこから吉野川を遡れば吉野川の河尻に出る。まさに「吉野河の河尻に到る」のである。

図 10　熊野から吉野川へ

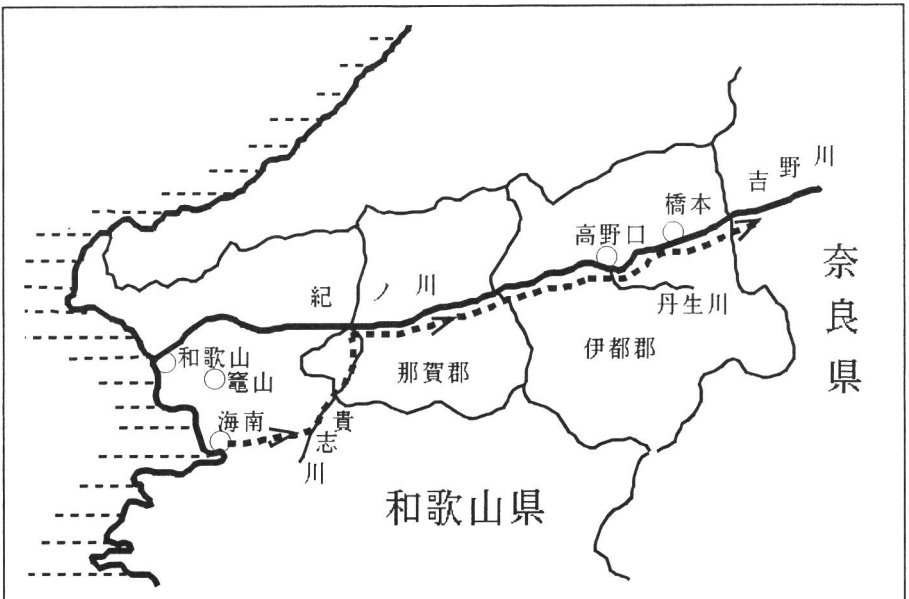


図 10　熊野から吉野川へ

『宮下文書』にも海南市から貴志川に沿って進んだと思われる記事がある。

> 即ち、久真野口より進軍することに決す。（中略）那賀戸長外十七戸長各兵を率いて来たり会し、先鋒たらむことを請う。
>
> 『宮下文書』

「久真野（くまの）」とは熊野であろう。熊野口から進軍するとある。その時、那賀戸長、他十七戸長が兵を率いて神武天皇の軍に加わったとある。

「那賀」は和歌山県那賀郡であろう。貴志川が流れている。神武天皇の軍は貴志川に沿って那賀郡を通ったのであろう。その時、那賀郡の戸長や他の十七戸長が神武天皇の軍に加わっている。

(5) 宇陀へ

吉野川の河尻から宇陀（うだ）へ向かう。

> 吉野河の河尻に到りし時、筌（うえ）を作り魚を取る人有り。ここに天神の御子、「汝は誰ぞ」と問う。答えて曰く、「僕（あ）は国神、名は贄持（にえもつ）の子」という。
>
> 其の地より幸行くと、尾ある人、井より出てくる。其の井に光あり。ここに「汝は誰ぞ」と問う。答えて曰く、「僕は国神、名は井氷鹿（いひか）」という。
>
> 即ち其の山に入り、亦尾ある人に遇う。この人、巌（いわ）を押し分けて来る。ここに「汝は誰ぞ」と問う。答えて曰く、「僕は国神、名は石押分（いわおしわけ）の子。今、天神の御子が幸行（い）でますと聞く。故、参り向かえぬ。」という。其の地より踏み穿（うか）ち越えて、宇陀に幸（い）でます。故、宇陀の穿（うかち）という。
>
> 『記』

吉野川を遡り、奈良県宇陀郡の穿（うかち）へ来ている。ここには兄宇迦斯・弟宇迦斯の二人がいる。「穿（うかち）」は「宇迦斯（うかし）」であり、地名である。今も宇陀郡菟田野町に「宇賀志（うかし）」がある。

兄宇迦斯（えうかし）は神武天皇に仕えず、刃向かう。大殿（おおとの）を作り、その中に押し機（人を殺す仕掛け）を作り、待つ。弟宇迦斯（おとうかし）はそれを神武天皇に告げる。そのために逆に兄宇迦斯は押し機に打たれて死ぬ。宇陀はこうして神武天皇の手に落ちる。

4　和歌山県伊都郡と伊都国

(1) 阿太

『記』は、その後忍坂へ行き八十建（やそたける）を伐ち、大和へ入る。ところが『紀』の方では一度吉野へ引き返す。

> 親（みずか）ら軽兵を率いて巡幸する。吉野に至るとき、人有り、井の中より出る。光り、尾あり。天皇問いて曰く、「汝は何人ぞ」と。対（こた）えて曰く、「臣は国神、名は井光」という。此則ち吉野の首部（おびとら）の始祖なり。
> さらに少し進むとまた尾有りて磐石を押し分けで出てくる者有り。天皇、問う、「汝は何人ぞ」と。対えて曰く、「臣は磐拝別（いわおしわけ）の子なり」という。此則ち、吉野の国樔（くず）部（ら）の始祖なり。

水（かわ）に縁（そ）いて西へ行くと、梁（やな）を作って魚を取る者有り。天皇、これに問う。対えて曰く、「臣は苞苴擔（にえもつ）の子なり」という。此則ち、阿太の養鸕部（うかいら）の始祖なり。　『紀』

宇陀から吉野川を西へ下り、阿太まで来ている。奈良県五條市に西阿田町・東阿田町・南阿田町がある。阿田は阿太であろう。神武天皇はここまで引き返している。

図 11　吉野川から宇陀、忍阪、磯城へ　（阿田＝阿太）

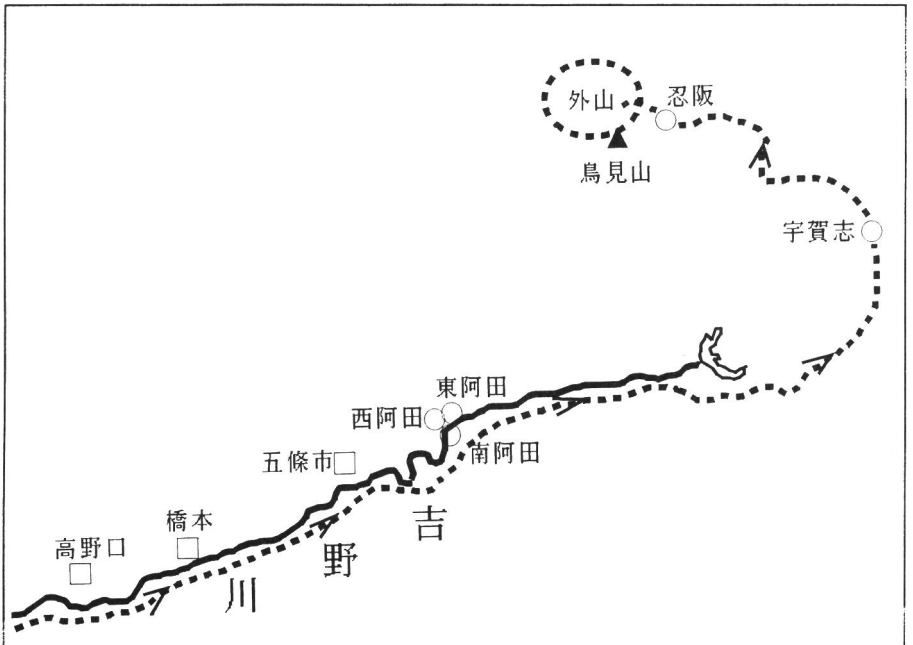


図 11　吉野川から宇陀、忍阪、磯城へ

(2) 丹生川と厳瓮（いつへ）

神武天皇は宇陀へ帰る。ところが各地に賊がおり、それより先へ進むことができない。悩んでいる天皇は夢を見る。

> 夢に天神有り、訓（おしえ）て曰く、「天香山の社（やしろ）の土を取り、以て天の平瓮（ひらか）を八十枚造り、併せて厳瓮（いつへ）を造り、天神地祇を敬（いわ）い祭れ。亦厳（いつ）の呪詛（じゅそ）をせよ。此の如くせば、虜（あた）は自ら平伏するであろう」。（中略）（椎根津彦と弟猾の）二人はその山（天香山）に至り土を取って帰る。是に天皇、甚（はなは）だ悦び、乃ちこの埴を以て八十平瓮・天手抉八十枚・厳瓮を造り、丹生川の川上に陟（のぼ）りて天神地祇を祭る。　『紀』

神武天皇は椎根津彦（しいねつひこ）と弟猾（おとうかし＝弟宇迦斯）の二人に土器を焼く土を取りに行かせる。その土で八十平瓮・天の手抉（たくじり）八十枚、および厳瓮（いつへ）を造り、丹生川の川上で天神地祇を祭るとある。これによって神武天皇はその後の戦いに勝つことができた。

この時、種々の名前を変更している。

> 時に道臣命（みちのおみのみこと）に勅す、「（略）其の置ける埴瓮（はにへ）を名づけて厳（いつ）の瓮（へ）とす。又火の名を厳（いつ）の香来雷（かぐつち）とす。水の名を厳（いつ）の罔象女（みつはのめ）とす。粮（かて＝食料）の名を厳（いつ）の稲魂女（うかのめ）とす。薪の名を厳（いつ）の山雷（やまつち）とす。草の名を厳（いつ）の野椎（のづち）とす。」という。　『紀』

諸々の名前を「厳（いつ）のＸＸＸ」に変えている。神武天皇は勅命を出してまで名前の変更を強要している。新しい名前はすべて「厳（いつ）」が付く。この「いつ」は「伊都＝イツ」ではないだろうか。「伊都国の」という意味である。

「厳（イツ）の瓮」とは「伊都国の瓮」という意味であり、「伊都国の土器」であろう。神武天皇が作った伊都国の土器（瓮）は他の地域の土器とは異なる形をしていたのであろう。

「厳（いつ）の呪詛」も同様である。伊都国には独特の呪詛があったのであろう。

火、水、薪、草などの諸々の名前も伊都国の呼び方に変更している。伊都国では「火を香来雷（かぐつち）」、「水を罔象女（みつはのめ）」と言ったのであろう。

(3) 和歌山県伊都郡

『宮下文書』にも神武天皇は厳瓮を作り、丹生川の川上で天神地祇を祭ったとある。その地を「丹生の本営」と書いている。

> 皇太子（神武天皇）は、時に丹生の本営に在しましぬ。一日、皇族大久米命・高座日多命を勅使として高天原に上らしめ、神祖神宗天つ大御神を祀り、国賊退治の祈願をなさしめ給う。また、丹生の川上にて高天原の天つ大御神を初め、諸々の天神地祇を親ら祷祀（とうし）ましまさむとし給う。然るに祭器なし、因て埴土を天香山に索（もと）めむとし給う。（中略）漸くにして宇須彦・弟猾、埴土を採り来りて之を献ず。皇太子大いに悦び、乃ち祭典の陶器を作らせ給う。宇須彦、丹生の川上の榊を堀り来たりて、祭典の料に供す。

皇太子、丹生の川上の武禮加奴に清筵（竹）を張り、親ら天神地祇を遥拝ましまして、国賊を退治せむことを祷祀ましましき。

『宮下文書』

神武天皇は丹生の本営に居て厳瓮を作り、祭祀をしている。『紀』の記述と同じである。

土を求め、土器を焼き、祭祀をしている。長期の滞在が必要であろう。「丹生の本営」とあるようにここに長期間滞在している。

この時、水、火、草等の名前を伊都国の名前に変更している。伊都国の言葉を強要している。それは伊都国をここに再興したからではないだろうか。神武天皇の一行は伊都国を捨てて来ている。「神武逃亡」である。北部九州の伊都国は消滅した。神武天皇はここに新しく伊都国をつくり、伊都国（イツ国）と名付けたのではないだろうか。すべての名前を「伊都（イツ）のＸＸＸ」に変更しているのはここを伊都国にしたからである。

和歌山県に「伊都郡」がある。紀ノ川の上流、吉野川の川尻のすぐ下流にある。この伊都郡の「伊都」は伊都国の伊都であろう。神武天皇の本営があったところではないだろうか。近くに丹生川がある。

図 12　和歌山県伊都郡と丹生川

それが後に「伊都＝イツ」は「伊都＝イト」と読まれるようになり、「伊都（イト）郡」になったのであろう。福岡県の伊都（イツ）国も後には「イト（国）」になっている。

和歌山県に伊都郡があるのは神武天皇がここに伊都国を再興したからであり、また神武天皇がここを通った証拠である。

図 12　和歌山県伊都郡と丹生川

5　忍坂より磯城へ

(1) 忍坂の戦い

神武天皇は丹生の本営を出て大和へ向かう。

> 天皇、其の厳瓮の粮を嘗（たてまつ）りて、兵を勒（ととの）へ出発する。先ず、八十梟帥（やそたける）を国見丘に撃ち破り、之を斬る。
> この役で、天皇の志には必ず克つという思いがあった。　『紀』

次に忍坂で敵と戦う。密かに道臣命に命じる。

> 餘（のこり）の黨（ともがら）は猶、繁（おお）く、其の情は測（はかり）難し。乃ち、密かに道臣命に勅す、「汝、大久米部を帥（ひき）いて大室を忍坂に作り、盛んに饗宴を設けて、虜（あた）を誘い、之を取れ。」という。道臣命はここに密かに旨を奉（うけたまわ）りて室を忍坂に堀り、我が猛き卒（兵）を選び、虜と雑居す。陰（ひそか）に期して曰く、「酒酣（たけなわ）の後に、吾、則ち歌をはじめる。汝等吾が歌声を聞けば則ち一時に虜を刺せ。」という。　『紀』

こうして忍坂の敵を酒に酔わせて伐つ。これは騙し討ちである。神武東征が征討であるならば騙し討ちはしないであろう。神武天皇の軍が弱小であるから騙し討ちをしている。これを見ても神武東征は征討ではなく、逃亡であることがわかる。

(2) 磯城彦との戦い

忍坂の虜を伐って磯城へ向かう。

> 皇師大挙して将に磯城彦を攻めむとす。先ず使者を遣わし兄磯城（えしき）を徴（め）す。兄磯城彦、命を承（う）けず。（中略）時に弟磯城（おとしき）曰く、「吾が兄、兄磯城彦、天神の子が来ると聞いて則ち八十梟帥（やそたける）を聚（あつ）めて兵・甲を具（そな）えて與（とも）に決戦せむとす。早くこれを図（はか）るべし。」という。（中略）
> 果たして男軍を以て墨坂を越えて、後ろより挟み撃ちに破る。その梟帥兄磯城等を斬る。　『紀』

こうして磯城の地も神武天皇の手に落ちる。宇陀から磯城までのルートは次のようになる。

図 11　吉野川から宇陀、忍阪、磯城へ　（参照）

(3) 長髄彦との戦い

神武天皇は遂に長髄彦と戦う。

> 皇師、遂に長髄彦を撃つ。連戦すれど勝つこと能（あた）わず。時に忽然として天は陰り、氷雨降る。金色の霊（あや）しき鵄（とび）有り。飛び来たりて皇弓の弭（はず）に止まれり。其の鵄光り、輝きて状は流電（いなびかり）の如し。是によりて長髄彦の軍卒は皆、迷い眩（くら）みて戦う力無し。
> 長髄は是邑の本の号なり。因りて亦以て人の名と為す。皇軍の、鵄の瑞を得るにおよびて、時人鵄邑（とびむら）と号す。今、鳥見（と

み）と云うは是訛（よこなま）れるなり。（中略）乃ち之（長髓彦）を殺す。其の衆を帥いて帰順す。　『紀』

鳥見（とみ）で長髓彦を殺すとある。奈良県桜井市に鳥見山がある。この付近は桜井市外山（とび）である。長髓彦が伐たれたのは鳥見（外山）であろう。

神武天皇は各地へ将軍を派遣して虜を伐つ。

諸将に命じて士卒を訓練する。この時、層富縣（そほのあがた）の波哆丘岬（はたのおかのみさき）に新城戸畔（にいきとべ）という者あり。又、和珥（わに）の坂下に居勢祝（こせのはふり）という者あり。臍見（へそみ）の長柄丘岬に猪祝（いのはふり）という者あり。この三処の土蜘蛛、並びに其の勇力を恃（たの）みて、来てしたがわず。天皇、偏師（かたいくさ）を分けて遣わし皆之を誅（ころ）す。
また高尾張邑に土蜘蛛あり。（中略）おそい殺す。因りて其の邑を号して葛城という。　『紀』

神武東征はこうして終わる。

神武天皇は鳥見で長髓彦を伐ち、そこから諸将を派遣して層富縣や和珥の坂下や臍見の長柄や葛城の土蜘蛛を伐っている。神武東征の最終地点は桜井市外山である。

従来は神武天皇は橿原市まで来ていると考えられてきた。しかし神武天皇が鳥見より先へ進んだという記述はない。